

北海道の登山スタイルとトイレ 3 題

横須賀 邦子(NPO 法人アース・ウィンド)

表大雪、北大雪、東大雪、十勝連峰を結んだ山々が大雪山国立公園で北海道の中央に位置しています。山脈の中央部分の最も奥まった位置に存在するのがトムラウシ山です。地図を見ると分かりますが表大雪と十勝連峰のつなぎ目に「く」の字に曲った部分にあるのがそうです。トムラウシ山と同じ大雪山に含まれる十勝連峰の美瑛富士山、アクセス便利な表大雪地域の黒岳、それぞれ 3 山のトイレ 3 題について考えます。

トムラウシ登山口へのアクセスは新得町から約 40 km 山懐に入り、トムラウシ温泉から登る日帰り往復約 17 km 獲得標高差 1460m を歩くルートが人気です。日帰りではほぼ 12 時間を要します。登り下りが大きいルートで体力を要求され、雨天のときはリタイアする人も多くいますし、日帰りできるとしても、午前 3 時に早発し夕方 4 時頃まで長時間かかります。帰ってくる人はヨレヨレが殆ど。夜になると館内の部屋のあちこちから流れてくるのが湿布葉の匂い。トムラウシ温泉らしい雰囲気になります！これをテント 1 泊行程にすれば山頂分岐近くにある南沼野営地に泊まるスタイルにすると、、、早朝にテントで目覚め、朝日を迎えてに登り 30 分で山頂到着、夜明けを待ってご来光を迎えられる余裕のトムラウシ山を楽しめます。もちろんテントを担いで歩ききれぬ登山者に許される者がその素晴らしさを享受できるのです。

みなさまの記憶にまだ新しいと思いますが、2009 年 7 月トムラウシ山で遭難が起きました。「旭岳からトムラウシ山縦走 3 泊 4 日ツアー」に参加した 9 名が低体温症で亡くなられ心痛む遭難でした。2012 年で 3 年になりますが道警は継続調査中です。この事故から避難小屋を作る必要があるか地元山岳会に賛否両論があると聞きました。設置に賛成する側は「万一のことが起きれば避難小屋の真価を発揮し遭難を防ぐことができる」というもの。反対する側の理由は「設置すれば小屋を目当てに登る登山者が増え、便利になったと勘違いされ利用が集中し新たな問題が出る」というものです。“仮に”小屋設置となれば、付帯する設備にトイレがあります。国はバイオトイレ以外は設置することに積極的ではありません。しかしそのバイオトイレが未だにうまく稼働せず困っているのが黒岳石室です。

黒岳石室にバイオトイレが設置されたのは 2003 年。利用者数の見込みが推定より大幅に増加したのと、便壺の温度管理がうまくいかない（電源供給等）ことが原因で、分解できなかったオガクズを人力で掻き出しているのが続いています。詰めた袋が小山を作っていることを知る人は少ないのではないのでしょうか（黒岳トイレについて別稿参照）。10 年近く稼働状況を改良しようとする手この手でご苦労されている様子が関係機関から伝わってきますが、決定的に解決するまで人力掻き出しが続きます。更にトイレ使用協力金の不足を補填する地元負担も続きます。バイオトイレを設置した結果、問題が新たに生まれた一例です。

いっぽう十勝連峰美瑛富士避難小屋に山小屋はあってもトイレ設置はないままです。そこへいたる登山道は通称「うんこ街道」と呼ばれているほどの汚染状況。トイレ設置にむけて提出した 26000 筆余の要望署名は宙に浮いたままですが、その理由は「トイレ管理の引き受け手がない」点です。美瑛富士避難小屋の宿泊者数は 7 月～9 月に集中し“シーズン中 500 名”の利用。同じ時期、本州中部山岳国立公園にある山荘では“1 日 100 名”でほぼ満員。美瑛富士避難小屋の利用者は均せば日 40 名ですが、土日に集中することを考慮すると平日はほぼ一桁の

利用でしょう。これほど少ないのです。トイレ設置の障害になる「管理団体」については、宿泊した登山者有志が自ら手入れするなど「緩やかな管理」を検討していただき地域の利用形態の特徴に見合った予算の使い方を導入することが必要です。全国どこでもバイオトイレで解決できると試行するのは間違っていないでしょうか。利用者が少ない山域は便壺方式のポットントイレで事足りるはずです。土日に集中しても40名なら十分使用に耐えるし、登山者が清掃することで管理の課題をクリアできます。しかし構築物の管理は修理や安全性など予算の出し方に難しい問題を孕むのですが、少ない予算で補修に大金を要さないものを維持するのが検討課題から抜けていると言わざるを得ません。要望書の重みを認めてもらえないまま年数だけが過ぎて行くのは理解できません。

さてトムラウシ山の話に戻ります。小屋が設置されたら遭難は減少するか。設備を施せば一時的に事故は減少し一旦収まってから同じ事故が増加する傾向があります。むしろ、設備する→遭難減少となる→事故が増加する→設備を更に増す、といういたちごっこが始まります。

ここで、数字から見る大雪山国立公園と中部山岳国立公園の比較をしましょう。

大雪山の面積は約23万ha 神奈川県と同じ広さで、1市9町が係る山域に山小屋は7箇所あります。山小屋の間隔は時間距離で登山口から3時間の場所にある地点から、次の小屋まで1日歩けば到着します。管理人がいるのは7箇所のうち黒岳石室と白雲石室だけ2箇所。しかも管理人は夏季のみで食事の提供はありません。大雪山では「山荘」ではなく「避難小屋」として20-60名の規模で小型の避難所という位置づけです。山小屋がなく野営地だけの地域も多くテント必携の山域であり構築物の無い真に原始的な空間で景観の優れた場所です。

平成23年大雪山地域の遭難発生件数は14件15名の遭難でした（道警発表）。前年に比較すると単独事故が多く設備は無くとも遭難は減少している状況です。

中部山岳国立公園の面積は約17.5万ha。新潟、富山、長野、岐阜県の4県9市3町2村に山小屋約78軒がひしめきます。多くの山荘が100名以上の収容規模で、山荘まで1~2時間で到達できるうえ、満員なら更に1,2時間歩くと次の山小屋へ到達することができます。3000mの高山でも寝袋を背負わずに宿泊でき食事を提供される便利なもので、登山を始めたばかりでも体力の余裕を見込まずに登ることができる環境にあり、だから道迷いや疲労による滑落が主な原因で多数の事故者となります。さて次の資料で「設備が整っているにもかかわらず事故の増加」について触れているので抜粋します。

=====

環境省中部山岳国立公園HP（資料：警察庁H22.6.22平成21年中における山岳遭難の概況）
登山者数は全体的に減少傾向であるものの、遭難者数は増加傾向にあり、平成12年の1494人～平成21年の2085人へ591人の増加がみられる。また、そのうち1602人は中高年の遭難であり、76.8%を占めている。

=====

山小屋の設備があっても遭難事故は減少しない北アルプスの例があるように、先に紹介した“設備配置が必ずしも遭難を抑止することにはならない”ということになります。

トムラウシ山に小屋を設置したら小屋の周囲は用を足すために隠れる場所を探して高山植物群落は踏みしだかれ、ますます汚物の散乱が想像されます。北海道の宝である原始的景観はどうなるのでしょうか。トムラウシ山の魅力は、長いルート上にある沼や湿原、あふれる高山植物、小川、岩頭、どれをとっても自然造形美が豊かだから名山として人々に登られる山です。

数万年にわたり成長した植物が花を咲かせ小川を形作り岩の上までチングルマが覆い、大岩がゴロゴロ、それらを縫うようにルートがあるのが魅力なのです。原始性の高いところに小屋ができれば、奥山の雰囲気は消え去り誰でも行かれる手ごろな山に変化し、小屋を利用する登山者の増加によるトイレの尿尿処理問題など新たな問題がおきるでしょう。

小屋があれば遭難は減るでしょうか、実のところ減りません。北アルプスの現状がそれを証明しています。北海道の大雪山は、原生自然の山のままでよいのです。

登山者の安全性向上は自身の体力と技術向上に拠るものだと思います。

※以下の資料はトムラウシ山大量遭難事故後調査発表されたものです。大雪山系登山口別入林者数上位 10 登

| 順位 | 登山口比率 | 年間入林者数 | 比率（累積） | | 管理者 |
|----|--------------|--------|--------|--------|-------|
| 1 | 黒岳（7合目） | 24,100 | 30.3% | 30.3% | 上川中部 |
| 2 | 赤岳（銀泉台） | 16,364 | 20.6% | 50.8% | 上川中部 |
| 3 | 旭岳 | 10,929 | 13.7% | 64.6% | 上川振興局 |
| 4 | 凌雲閣（十勝岳温泉） | 6,818 | 8.6% | 73.1% | 上川南部 |
| 5 | 十勝岳（望岳台） | 4,591 | 5.8% | 78.9% | 上川中部 |
| 6 | 大雪高原温泉 | 3,371 | 4.2% | 83.1% | 上川中部 |
| 7 | トムラウシ温泉 | 2,404 | 3.0% | 86.1% | 十勝西部 |
| 8 | 白雲山（天望山・東雲湖） | 1,799 | 2.3% | 88.4% | 十勝西部 |
| 9 | 愛山溪 | 1,647 | 2.1% | 90.5% | 上川振興局 |
| 10 | ニセイカウシュッペ山 | 1,228 | 1.5% | 92.0% | 上川中部 |
| 11 | その他 | 6,357 | 8.0% | 100.0% | |
| 合計 | | 79,608 | | 100 % | |

山口（平成 21 年）出典；「北海道」ツアー実態調査